

# アンコール遺跡国際調査団活動基本理念

石澤 良昭 アンコール遺跡国際調査団団長（上智大学教授）

## < 目 次 >

1. 文化財を科学する
2. 民族文化のアイデンティティー 東南アジア4大遺跡の比較研究 —
3. 1980年からのアンコール遺跡 調査・研究・保存・修復
4. アンコール遺跡の調査・研究・保存修復活動
5. 発掘・保存修復を通じた文化協力
6. カンボジアでは文化衝突の連続である — 日本の支援体制 —

## 1. 文化財を科学する

文化財の保存修復の重要性および緊急性についてはすでに多く議論がなされてきた。21世紀には科学技術が飛躍的に発展し、情報化が著しく進み、世界全体の均一化と機械化がさらに進みつつある。文化財の研究保存と修復の事業は、こうした世界の均一化現象とは反対に、個性豊かな民族の伝統と、その国（地域）の固有の文化および歴史成果を私たちに実証してくれると同時に、未解決の歴史・文化・社会などの問題を究明する重要な手掛かりを与えてくれる。

こうした保存修復活動推進の背景には、1つに文化財の存在する国もしくはその民族の立場に立った考え方があり、他の1つは世界的人類的な立場に立った考え方がある。私たちは何よりも第一の立場を重視し、そのためにどのような手伝いができるか、それがその国の文化財の修復活動の将来にどのようにつながるのか見極める必要がある。

## 2. 民族文化のアイデンティティー — 東南アジア4大遺跡の比較研究 —

これらの遺跡研究を遺跡と民族という視点から考えるならば、そこに住む人達に民族のルーツを考える手掛かりを発掘し、アイデンティティの基礎となる資料を提供するものである。学術的裏付けにより、住民は民族的誇りと自信を持つことになり、各国とも歴史の研究、遺跡の保存とその公開を重要な文化政策に位置付けている。遺跡研究の現代史的な意義は大きいといわねばならない。

私たちは1984年から、遺跡を守る努力はまず「人」の国際協力から始める必要があるという方針を掲げ、「東南アジア文化遺産の保存修復に関する比較基礎研究」プロジェクトを発足させた。それは日本・タイ・インドネシア・ビルマの4ヶ国の専門家32名で組織され、そのメンバ

一の中にはインドネシアから元ボロブドゥール公園総裁のハリヤティ・スバデオ女史、タイからは元シラパコ大学長のディサクン殿下、ミャンマーから元マンダレー大学のタントウン教授、日本からは故千原大五郎先生と伊藤延男先生が出席下さった。それに、ユネスコの元アジア課長の河野靖氏が加わって下さった。そして、ボロブドゥール・パガン・スコータイ・アンコールの4遺跡を採り上げ、ユネスコは東南アジア版の地域文化協力プログラムと位置付け、高い評価を受けた。その間に7回におよぶ現地国際シンポジウムを開催し、遺跡の現地検証研究を行い、日頃地元で保守作業に従事している専門家たちにも出席を求めた。討論に参加してもらい、事例研究を発表してもらった。「アジア現地に学ぶ研究」の姿勢は、私たちの基本的な考え方であった。これら4遺跡を守るための専門家同士の国際協力は、シンポジウムの成果として、英文の1400ページに及ぶ重厚な報告書 Cultural Heritage in Asia, vols.1-7, (Institute of Asian Cultures, Sophia University, 1985-1992) にまとめられた。

結論として、文化財は民族の誇りと伝統の象徴である。その修復はそこに住む人達の手でなされるのが原則である。民族の固有な文化を世界へ向かって説明できる人々は誰よりも現地に暮らす人々である。遺跡などの保存修復に関する国際協力は、何といても人材育成などそこに暮らす人々の自立を助ける協力がその基本でなければならないと考える。

### 3. 1980年からのアンコール遺跡調査・研究・保存・修復

私たち上智大学を中心とするアンコール遺跡国際調査団は、1980年から内戦中にもかかわらず兵隊に守られて遺跡保護の応急工事などを手伝ってきた。最初は同年に再開されたアンコール遺跡管理事務所を支援するかたちで始まったが、応急工事といっても石材の落下を防ぐ支柱を立てるとか、遺跡にたまった水を抜くとか、熱帯の植物の下生えを除去するとか、人の手による保護活動が中心であった。1975年からのポル・ポト政府下でカンボジア人専門家が不慮の死を遂げていたのでカンボジア側もアンコール遺跡をどのように保護していくかわからなかった。

アンコール遺跡群は1970年からの内戦と国内混乱のためにこれまで20年あまりにわたり放置され、戦闘による破壊や盗掘、それに熱帯の厳しい自然のもとで野ざらしとなり、現在も崩壊の危機に直面している。カンボジアのパリ和平協定が1991年に結ばれ、国連のPKO活動を経て1993年からカンボジアには平和が戻った。1997年7月には武力衝突があり、私たちを心配させたが、調査、研究は再開された。私たちが18年間の経験から得た結論は、「カンボジア人による、カンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復」が必要であるということであった。

### 4. アンコール遺跡の調査・研究・保存修復活動

アンコール遺跡の調査・研究および保存・修復活動プロジェクトは1997年3月までに5回の予備調査団および22回の調査団を派遣してきた。調査団には、日本とカンボジアを中心にフランス・アメリカ・イギリス・スイス・オーストラリア・ベルギー・エストニアなど9ヶ国から79人(延べ人数)の専門家が参加してきた。それらの調査・研究の成果は、14冊の報告書『カ

ンボジアの文化復興』(vol. 1-14, 1984-1997)にまとめられ、日・英・仏・カンボジアの4か国語で書かれている。また、一般啓蒙書として『アンコール遺跡を科学する』5冊が刊行されている。

#### (1) バンテアイ・クデイ遺跡およびアンコール・ワット西参道の現場から

調査・研究・保存修復を実施している遺跡はバンテアイ・クデイ寺院(12世紀末)およびアンコール・ワット西参道であるが、両遺跡とも主としてカンボジア人研修生の現地訓練の場所でもある。現地ではアンコール地域遺跡整備機構(アプサラ)およびアンコール遺跡事務所と協力して調査活動を実施し、保存修復作業が綿密な調査データに基づき始まっている。調査団はフランス極東学院の技術工法を踏まえながら、土着技術に注目してカンボジア人作業員のトレーニングも実施している。石材の強弱診断法を新しく開発し(共振法:東北工大盛合禧夫教授)、熱帯アジア遺跡の新技法を構築・開発中でもある。

#### (2) カンボジア人研修生の養成プロジェクト

カンボジア人若手技術者および学生の人材養成活動は1990年3月から始まった。第1回はプノンペン芸術大学(現在の王立芸大)の考古学部と建築学部において1ヶ月にわたる集中講義、第2回からは集中講義と学生の現場実習の2本立てとなった。また、1991年3月からはバンテアイ・クデイ遺跡において学生の現場研修を開始した。1997年12月まで7年半の間に現場実習が17回、176名(延べ人数)の学生が480日間の専門研修を受け、35名の専門家・教授がこの指導に当たってきた。1994年からは保存修復工事に備えてカンボジア人石工の訓練が始まり、成果をあげている。1997年2月からは調査団の専門家がユネスコと協力して、同芸大で「Cultural Site Management」および「カンボジア史」をカンボジア語で講義している。

私たちは、考古学科の学生5名と建築学科の学生5名を選び、講義および現場実習を通じて高度な専門知識とより実践的な実習ができるように専門カリキュラムを作り、年次進行で講義と実習を実施してきた。そのために保存科学の専門分野のカンボジア語のテキストも作成し、測量の実習も必修であった。ほぼ毎年3月・8月・12月にバンテアイ・クデイ遺跡において現場実習を継続的に実施してきた。そしてカンボジア人研修生などが合宿をして講義を受け、実験や図面作成ができる上智大学アンコール研修所(2階建て、約290平方メートル)も1997年8月に完成した。

奈良国立文化財研究所では、アンコール遺跡国際調査団の現場実習を受けたプノンペン芸大の学生の中から数名を選び、1994年10月から日本で専門研修を実施している(アンコール・ワット共同修復事業)。この奈文研の専門研修は毎年続けられている。

さらに高度な専門研究をするための日本での保存科学・地域文化研究関係の大学院教育プロジェクトが始まった。宗教法人真如苑奨学金プログラム(1997-1999)によりアンコール遺跡現場で7年半研修に参加した学生の中から2名を選抜し、1997年6月に上智大学大学院地域研究専攻で学位を取得するため来日した。同年日本外務省のアジア・ユース・フェローによる大学院生2名が来日し、1名が上智大学大学院へ入学した。現在熱心に修士課程で学んでいる。

#### (3) 遺跡・村落・森林との共存共生プロジェクト

私たちは遺跡の保存・修復だけを考えているのではなく、遺跡の周辺で生活している村人たちの農村社会と民族文化を再興するプロジェクトが1991年8月から始まった。近隣森林の自然環境の調査（植物・生態など）およびバンテアイ・クデイ遺跡周辺の村落調査や水利・水質調査などが実施されている。さらにシェムリアップ州の無形文化財についての調査、特に小型影絵芝居、トロット（鹿頭行列）などのインベントリー作成調査が続けられている。特に北スラ・スラン村の経済・社会調査や伝統民族文化の調査成果が積み上げられている。これが村落と森林と遺跡の共存共生プロジェクトである。

## 5. 発掘・保存修復を通じた文化協力

私たち上智大学調査団（アンコール遺跡国際調査団）には早大（政経学部）・東北工大・東大・金沢大・日大・京都府立大・帝塚山学院大・奈良女子大・奈良国立文化財研究所・大阪市文化財協会・建築文化研究所・日本品質保証機構・東洋エンジニアリングなどから各分野の専門家・研究者が参加し、次のような方針を掲げて活動している。

第1：カンボジアの文化遺産はカンボジア人の手で責任を持って守ること。カンボジアの文化財はカンボジア人の専門家が保存修復し、これを後世に伝えていくべきであるという考え方から、それを守る専門家（研究者と技術者）の養成が8年目に入っている。カンボジアの自立を援ける人材養成である。

第2：文化財の調査・研究と保存修復事業の密なる連動。文化財の保存修復は損壊箇所を直して後世に伝えればよいというだけでは不十分である。それらの文化財がどの時代の、どんな材料で作られ、その目的、その宇宙観、様式などの科学的解明に基づかない修復は、本来のものを破壊することになる。つまり、綿密な学術的調査・研究に連動する保存修復でなければならないのである。

第3：遺跡保存の修復研究には中・長期的展望が必要である。綿密な遺跡調査を行うとともに、これに基づいた中期および長期的なマスタープランに基づき保存修復について考えねばならない。長期とは30年とか50年という単位で保存修復を継続し、伝統工法・技法を再評価し、カンボジアにおいて使えるように改良しながら先端技術と土着工法を組み合わせしていく。遺跡を取り巻く自然環境についても、水利灌漑や植物・生態環境も長期的な展望に基づき考える必要がある。文化協力は地味な長期にわたる仕事である。

## 6. カンボジアでは文化衝突の連続である — 日本の支援体制 —

日本において東南アジア地域の言葉を学び、考古学や建築学を修めた専門家は数が限られている。日本の技術は最高で、援助するお金もあり、有能な研究者・専門家がいるという日本上位の考え方に立つと、そこには相互の信頼関係は生まれてこない。熱帯アジアと日本では風土が

異なり、想像できないような障害のために日本方式の方法論が有効とは限らない。

これまで述べてきたように、遺跡などをその地域社会から切り離し、カンボジア文化の文脈で読むことをせず、技術的観点からの修復のみに終始する技術至上主義はやめなければならない。遺跡を守る協力はただショベルカーで掘ってクレーンで石材を積み直せばよいというものではない。まず、何よりも遺跡の綿密な基礎調査や研究、石積み手法などの研究と経験が必要である。現地の技術レベルに適合した技術導入から始まり、現場を見ながら徐々に新機器や先端技術を持ち込まなければならない。文化協力の原点を踏まえておかないと、文化遺産の保存協力には決してならないし、遺跡破壊といわれてしまう恐れがある。

こうした文化遺産の研究や保存協力には、発掘手法に習熟した考古学者、修復経験を積んだ建築家、石材を動かせる有能な石工など、まず何よりも「人」の養成から始めなければならない。私たちはカンボジア側専門家と共同で人材養成や発掘および修復事業を行っているが、いろいろなところで文化摩擦が起こっている。日本では当たり前のことがカンボジアではそうでないという事例が沢山ある。しかし、現地の人達から学ぶことも沢山ある。この地方の影絵芝居を見るとか民話を聞くこともある。いつ田植をすとか、どうすれば水が抜けるとか、この木の実は薬効があるとか、毎日住民に教えられることも事実である。

結局のところ、文化協力とは「ぶつかり合い学ぶ」ことであることを実感するのである。こちらが善意と思っても、カンボジア側は干渉と受け取る場合がある。日本のやり方だけが普遍的とは思わないが、こうした文化摩擦はいい意味での相互理解の始まりである。文化協力はつまるところ「人」の交流であり、そこにおいていかに相互の信頼関係を構築していくかにかかっている。しかし、18年間の経験からいえば、2割が実際の活動事業（調査・研究・修復・教育など）で、8割がそれ以外の現地側とのやり取りや諸準備である。

結論として、アンコール遺跡群はカンボジア民族の誇りと伝統の象徴である。その保存修復はあくまでも現地の人々の手でなされることが原則である。遺跡などの保存修復事業に関する文化学術協力とは、何とんでもそこに暮らすカンボジアの人々の自立を助ける人材養成などがその基本でなければならないと考える。

(1998年)